

# 総合表現型カリキュラムの実践への一考察

時 得 紀 子\*

(平成21年6月18日受付, 平成21年12月4日受理)

## A Practical Study of Integrated Arts Curriculum at Schools

TOKIE Noriko\*

For the past 20 years, this author has worked with integrated arts curricula at elementary and junior high schools. From these experiences, she has found that a new problem is facing many of today's Japanese schools; children are losing their ability to communicate with others. To solve this problem, this paper presents the idea of using an integrated-subject class that culminates in an original musical production, produced, written, directed and performed by the students, to cultivate and enhance expressive and communicative abilities. Furthermore, the author also intends to show how subject integration fosters a deeper kind of learning for students. For instance, at a junior high school attached to the Joetsu University of Education, students had to assemble all that they had learned during their time at the school and put it into musical form, and this allowed the students to approach the subjects they had studied in different ways.

Key Words : Integrated arts curriculum, Communication skills, Curriculum Models, Musical, Multiple Intelligences

### 1. 本論の目的

今回の教育改革の学力観である「人間力」は、総合的かつ探究的な学びを重視し、その基盤となる世界標準学力である「キー・コンピテンシー」においても、知識・技能を問題解決や、異質な集団における理解・交流などに相互作用的に生かすことの重要性を指摘している。一方、PISA調査などの評価の枠組みにおいては、主体的、創造的、協同的に取り組む態度の育成などが新たに掲げられた<sup>(1)</sup>。

こうした主体的、創造的、協同的に取り組む態度の育成やプロセス重視の評価の方法と、総合表現活動に深く関連している総合的な学習、音楽科の活動は本質的に共通しており、互いに連携しやすい性質を持っている。さらには、総合表現活動を構成する際の主軸となる活動であるところの音楽、絵画、舞踊の創作、作詞等の創造的な活動は、先述の「キー・コンピテンシー」を育む上でその土台となる課題解決への発想力や、他者とかかわりながら創造する力を培う意味でも、極めて重要な役割を担うものであると捉える。これらの基礎的な表現力を横断的にかかわらせながら仲間と共に創り上げる、総合表現活動の実践を経て、子どもたちは社会生活における芸術の役割や、他者とかかわる力などさまざまな力を獲得している<sup>(2)</sup>。これらの成果は後述する、継続した総合表

現活動の実践を経た子どもたちへの意識調査の結果等からも明らかになっている。

筆者は20年近くの総合表現活動の実践現場にかかわりながら、今日的な学力観を支えるさまざまな基礎的な力を子どもたちが獲得しているという成果を得ている反面、教育現場からの深刻な課題にも直面してきている。

本論では、こうした問題の所在を明らかにしていくためにも、さまざまな考察を試みるものである。このことは同時に、子どもたちの幅広いコミュニケーションの力を学校という公教育の場において育成していかねばならないという、今日的な緊急課題にも対応している。具体的には、子どもたちの表現・コミュニケーション力を培うことにおいて、本来大きな役割を負うべき既存の音楽科および美術科(図画工作)の教科枠における従来の学習活動では、これらの能力を培いきれないという現状を克服しなければならないという大きな課題である<sup>(7)</sup>。

そしてその現状を改善していくためのカリキュラム開発の必要性からも、これまで以上に既存の教科枠を超えた改編や表現がかかわる授業の探究に挑む時期にきているものと捉えている<sup>(8)</sup>。

本研究は、子どもたちの幅広いコミュニケーション力を学校教育において培っていくための活路を総合表現型カリキュラムの実践に探ることを目指すものである。

\* 上越教育大学 (Joetsu University of Education)

本論の始めにおいては、我が国の総合表現活動の20年以上の変遷のうち、取り分け萌芽期の実践においてどのような教科間の統合が目指されていたのかを振り返り、今日の教科を越境する多彩なカリキュラム展開に至る以前の原点に立ち返ることを試みる。そして、そのような萌芽期に続いて、1995年以降の僅か数年間のうちに、総合表現活動がさまざまな教科の学びとかかわらせた実践へと急速に発展した軌跡をも振り返る。続く項では、全国の20例を超える実践への参観訪問を経て抽出したいくつかの事例をもとに独自の分類を試みた、1997年作成のカリキュラムのタイプ別分類<sup>9)</sup>を再掲する。

かくして萌芽期を経て以降今日に至るまで、各学校の独自の特色を打ち出しながら、総合表現活動の取組は多彩に展開されてきた。本論では紙幅の都合上、これらのあまたの実践の中から、大規模な教科・再編に挑んだ、上越教育大学附属中学校の事例に焦点を絞り、総合表現型カリキュラムの構成、その活動の成果や課題等を探る。

## 2. 総合表現型カリキュラムについて

### (1) 「総合表現型カリキュラム」とは

総合表現活動の課題や成果を踏まえ、表現に関する学習を総合的に行うための学習内容を系統化したカリキュラムの総称を総合表現型カリキュラムとすることができよう。2002年度の総合的な学習の時間の実施を機に、総合的な学習の中でのカリキュラムデザインの一つとして取り入れられ、芸術教科間を統合する試みなど幅広い実践を包括しており「総合表現活動」という用語と同様、やはり教育方法学の研究者から発信された呼称である。

総合表現型カリキュラムは、課題研究の最後の段階で、発表の方法の一つとして寸劇を行うのとは異なり、始めから総合表現の魅力を味わい、表現者の組織を立ち上げ、表現のスキルをきちんと学びながら最終的な上演発表会にまで至る系統的な表現教育なのである<sup>14)</sup>。

このように総合表現型カリキュラムを説明している田中は、さらに「総合表現力とは、表現の組み合わせ能力」であり、表現とは「コミュニケーション」というキーワードでくくる事が出来る。」として、この総合表現型カリキュラムにおいて培う力を総合表現力と捉えている<sup>15)</sup>。具体的には、多様な表現方法の組み合わせ能力、それぞれの表現活動が主に扱う情報伝達の種類を強調し、これまで各教科で別々に扱ってきた、音づくり、絵づくり、お話づくり、動きづくりという四つの活動を統合しマルチメディアの作品づくりや総合演劇活動を行う力、「総合」の概念を広げ、企画・製作・上演までを一貫して行う能力、などの力を培うことができると述べ

ている<sup>16)</sup>。

このような定義から実践を捉え直すならば、総合表現型カリキュラムは、単に教科の接続的な統合によって成立するカリキュラムではなく、各教科の再編と共に、多様な表現領域を統合するカリキュラムであるともいえる。

また、教科再編においては、よく練られたカリキュラムによるアプローチによってこそ、子どもたちに豊かな総合表現力を培うことが可能になるともいえるであろう。

### (2) 総合表現型カリキュラムの誕生までの変遷

総合表現活動という用語は、総合的な学習の研究開発やカリキュラム開発の過程で、音楽科や図画工作科・美術科ではなく、教育方法学の分野から誕生した。こうした由来が示唆するように、音楽科や図画工作科・美術科といった、芸術教科の中の表現活動にとどまらず、さまざまな教科・領域とも横断的にかかわりながら、実に多様な実践が展開されてきた。

筆者は平成8年度から10年度まで、「総合的な学習に関する研究開発学校等の研究成果と実践的課題」について2度に及ぶ文科省委託研究の機会を得て、フィールド調査に基づく開発研究に携わった<sup>13)14)</sup>。さらに『総合的な学習のすすめ』<sup>15)</sup>等への執筆を通じ、総合的な学習と表現教育の視点から、全国の小・中学校の総合表現型カリキュラムのタイプ別類型化を行なうなどのさまざまな考察を試みてきた。その後も小・中学校における総合的な学習と表現教育にかかわる文科省研究指定校を含む、全国の研究先進校への授業参与を経て、カリキュラムデザインの異なる、総合表現活動の多彩な授業モデルを抽出し、その成果と課題について研究を継続してきた<sup>16)</sup>。

総合表現活動の試みが活発化した90年代半ばには、ほぼ時を同じくして「生きる力」の育成が大きく掲げられ、さらに2002年からの総合的な学習の実施という追い風もあり、重ねてタイムリーであったといえよう。こうした土壌を背景に徐々にそのニーズを高め、子どもたちが主体的、創造的、協同的に取り組む学びが探究される中で、創意工夫を生かしながら、全国の小・中学校でそれぞれの独自性を打ち出した総合表現活動が続々と開花したのである。しかしながら90年代後半以降に見られるような、全国レベルでの多彩な教科の再編・統合を伴う実践が広がるまでには、総合表現活動における模索の時期があった。その多くは、教科間の接続を試みる、「教科関連型カリキュラム」の実践にとどまり、教科を超えて総合するといった有機的な関連の成立を見るまでには、まだしばらくの時間を要したといわねばならない。

1991年度、1992年度の東京都千代田区立錦華小学校（現お茶の水小学校）の「表現科」という初の試み<sup>10)</sup>では、「音楽と図画工作を始めとする芸術教科の枠を広げ、児童の発達段階に即して総合的に表現活動に取り組

む」というねらいを掲げた。1993年度には、香川大学附属高松小学校、福島大学附属小学校も時を同じくして「表現科」の設置を開始した。中学校においても1993年度年度から、宮城教育大学附属中学校が音楽科、美術科、体育のダンスの領域を統合した「芸術科」を設けたが、これらの実践は萌芽期の先進的な事例となった。こうして90年代前半から新しい教科として「表現科」を設置しようとする研究は活発化した<sup>(11)</sup>。しばらく後の1996年頃からは、神戸大学附属明石小学校が、幼・小・中、12か年の連携したカリキュラム開発<sup>(12)</sup>に挑み、生活科、音楽科、国語科を統合した「教科統合型カリキュラム」の成果を公開した。

一方、総合学習の元祖ともいわれる長野県伊那市立伊那小学校は、伝統的なクラス単位の取組で総合学習を長年実践してきた<sup>(13)</sup>。動物を飼育するといった経験をもとに創作される音楽劇には、子どもたちの深い思いが凝縮されている。そこで、体験活動を重視する伊那小学校に代表される実践を「経験型カリキュラム」と位置付けた。

こうして全国各地でその多彩な取組が始められた「総合表現型カリキュラム」における表現領域の網羅は、国語科における言語表現、音楽科における音の表現、図画工作・美術科における造形表現、体育の表現運動領域における身体表現等、各教科の表現領域から派生した表現内容を重点化、発展、総合化し、配列している特徴もっている。総合表現活動の根底にあるのは、教科横断的学習の重点化と発展、そして統合化である。

この萌芽期以降は、複数の教科・領域と表現活動をかわらせた「学際型カリキュラム」と分類される、本格的な総合表現型カリキュラムが主流となり、より多様な実践へと受け継がれていったのである。

### (3) カリキュラムのタイプ別分類

総合的な学習の時間の開設に向けて、各学校の試行錯誤が始動した90年代頃から、さまざまな教科の学びとかわり、総合表現活動として集大成された劇やミュージカルで演じられる実践が試みられ始めた。そしてその成果が研究先進校などでの公開研究会で発表されるようになって、さまざまな教科・領域と音楽科や図画工作（美術科）、総合的な学習が横断的にかかわる、複合的、かつ総合的な「学際型カリキュラム」がこれ以降の事例の多くを占めるようになったのである。

しかし学校教育において、この総合性についての考え方は多様であり、従って各実践校の取組がどのようなタイプに該当するものなのか、総合表現活動のタイプを分類・整理しておく必要性が生じた。そうした背景から、筆者は1997年に全国の研究先進校の実践をもとに、カリキュラムのタイプ別の分類を試みた<sup>(17)</sup>。カリキュラム開発の事例を分類・整理する際に我が国においては学

習指導要領との関連もかかわってくるため、作図には教科構成および学習指導要領内容への準拠の程度も組み込んだ。

本論では、12年前の分類に若干の修正を加えて、次に再掲する。この「図1」に示される。カリキュラム分類図の「学際型カリキュラム」の中でも、全国の先陣を切って大規模な教科再編に挑んだ、新潟県上越市立大手町小学校の「創造表現単元群」の実践は<sup>(18)</sup>、総合表現活動のカリキュラム構成に一大改革をもたらすことになった。

その対象とする学習活動は、従前の音楽、図画工作、体育や国語、家庭科の一部など多くの教科内容にまたがっており、この新単元群である、「創造表現単元群」の中だけで、大規模な音楽劇の製作も十分可能である。1997年2月に開催された大手町小学校の公開授業研究会<sup>(19)</sup>では、大手町小学校の子どもたちによって、創作舞踊、遊び歌の替え歌づくり、自由な絵画制作などが渾然一体となった総合表現活動の公開が体育館いっぱい、ところ狭しと繰り広げられていた。

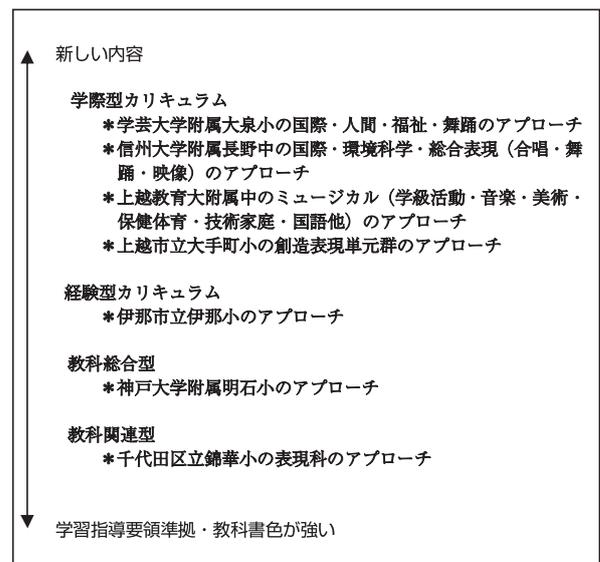


図1 表現活動のカリキュラムのタイプ(時得 1997)

一方、教科担任制を取る中学校においても本格的な教科・再統合への実践が始動した。上越教育大学附属中学校（以下、附属中学校とする）では音楽科・美術科を核として、総合的な学習の時間、保健体育科のダンスなどほぼすべての教科がかかわった、ミュージカル制作の実践が産声をあげた。

附属中学校は、1990年代後半から、「総合」と「教科」の枠組みについて常に先進的な研究を継続してきた<sup>(20)</sup>。こうした中で同中学校の総合学習の通称、「グローバルセミナー」は、1995年に国際理解、情報、環境等の地球規模の課題を追求する場として設置され、各教科、

領域の重なる教育活動を整理し、関連させるネットワーク化を図りながら実践されてきた。そして、2004年度から2006年度までは文部科学省の研究開発校の指定を受け、「総合的な学習の時間と教科の枠組みを再編した新たな教育課程の開発 一切実感を高めながら学び続ける生徒の育成—」をテーマとして、この大教科制度を発展させた「さくらPLAN」<sup>(21)</sup>を創造し、教育課程に位置づけた<sup>(22)</sup><sup>(23)</sup>。

本論では次項において、この附属中学校における、2004年度から3年間の新教科設置<sup>(24)</sup>のもとで試みられた、総合表現型カリキュラムの取組に焦点をあて、教科担任制を取る中学校にありながら、他に類を見ないほど大規模なカリキュラム改編<sup>(25)</sup>に挑んだ実践の成果と課題について考察を試みるものである。

### 3. 上越教育大学附属中学校の取組

#### 1) 再編8教科によるカリキュラム

附属中学校が挑んだ再編8教科、すなわち「総合社会科」「科学技術科」「生活健康科」「表現創造科」「情報活用科」「英語科」「国語科」「数学科」のうち、「今日的な課題を追究する総合的な学習の時間と既存の教科とを一体化した教科」は「総合社会科」「科学技術科」「生活健康科」であり、「創造的なコミュニケーション能力を効果的に高める総合的な学習の時間と既存の教科とを一体化させた教科」は「表現創造科」「情報活用科」「英語科」である。また、教科名の変化はないものの、国語科、数学科は目標を従来より一層具体化した教科として設置している。この他、道徳と学級活動を一体化させた「人生ゼミ」も編み出された<sup>(26)</sup>。

これらのうち、従前の芸術教科がかかわるところの「表現創造科」に焦点をあてて次に述べていく。

#### 2) 「表現創造科」について<sup>(27)</sup>

「表現創造科」は、主として美術科と音楽科の教諭の2名で担当している。ミュージカルの単元においてのみ、保健体育科の教諭1名がさらに加わり、指導に携わる。

この新教科のカリキュラムにおける中核的な活動が3年生による、12月の上演に向けたミュージカルの活動である。「表現創造科」では、ミュージカルの制作を3年生の4月から12月まで長いスパンをかけて行っている。また、ミュージカル上演に向けてその基盤になるさまざまな力を育てる、段階的な総合芸術的表現活動を1、2年生の2年間においても実践している。この間のカリキュラムでは、総合表現活動が生徒にもたらす「生きる力につながる学び」を中心に諸活動を組み込み、今日的な教育としての総合表現活動の意義を考えることも配慮がなされている。

次に「表現創造科」の教科の概要などについて、ミュ

ージカル制作に向けた、3年間の活動の詳細を以下に掲げる。

#### (1) 「表現創造科」の目標と内容のあらまし

この新設教科では、従来の音楽科・美術科の学習に加え、新たにミュージカル制作やビデオづくり、リズムパフォーマンスのような、既存の教科の枠を越えた幅広い表現活動を取り上げることにより、生徒の表現力や創造力の向上とともに豊かな感性の育成を目指す。

また、「表現創造科」は、総合的な学習の時間との一体化により、拡充した授業時間を有効に用いるなど、単独教科では設定が難しかったさまざまな学習活動に取り組む中で、生徒の広く芸術を愛好する心情が育まれることが期待できる<sup>(28)</sup>。このような「表現創造科」の目標は、以下のように設定された。

表現および鑑賞のダイナミックな活動を通して、芸術的な表現力と芸術を愛好する心情を育てるとともに、自己の感性を磨き、自分の内面をより豊かにしようとする創造力や豊かな情操を養う<sup>(29)</sup>。

#### (2) 具体的な手立て

「表現創造科」を具体的に展開していくために、以下のような場の設定や活動が具体的な手立てとして構想された。

- ㊦ 芸術的な表現力や豊かな感性、コミュニケーション能力を育む総合芸術的な表現活動や鑑賞の活動を展開する。
- ㊧ 目指す作品表現の素晴らしさを効果的に示す場の設定と支援の在り方を工夫する。
- ㊨ 受け手を意識した発表活動を重視し、制作途中で情報や意見を交換する場を設定する。
- ㊩ 生徒が自他の作品を振り返る場を設定し、一人一人が必要とする支援を行なう<sup>(30)</sup>。

これらの㊦～㊩までの手立てには、次のような能力を複合的に培う特性がある。

- ・新しい表現に積極的に挑戦すること。
- ・自己のからだを使ってできる表現の可能性を考えること。
- ・表現の中に芸術性を求めること。
- ・仲間と協力して活動に取り組むこと。

#### (3) 時数の運用

先述のように3年次は、ミュージカル制作が中心となり、年間で音楽科35時間、美術科35時間、総合的な学習50時間の合計で120時間が費やされる<sup>(31)</sup>。

- 1 学年 全95時間 (音楽45時間 美術45時間  
総合的な学習の時間 5時間)
- 2 学年 全95時間 (音楽35時間 美術35時間  
総合的な学習の時間25時間)
- 3 学年 全120時間 (音楽35時間 美術35時間  
総合的な学習の時間50時間)

#### (4) 題材の流れ

ミュージカルづくりの学習は、4月から12月までの9ヶ月間の期間、総時数70時間以上をかけて行われる。活動の大まかな流れは次の図のとおりであり、活動の鍵となる場面は以下の4場面である<sup>(32)</sup>。

- ①テーマや内容、役割分担などを決定し検討を行う学級討議の場面
- ②全体を3グループ(音楽・美術・ダンス)に分けてそれぞれの創作部分を担当するパート別活動の場面
- ③実際の舞台を想定しながら練習する舞台稽古の場面
- ④上演フィナーレの場面

次に掲げる図は、この4つの場面を中心にした活動内容の流れを示したものである。

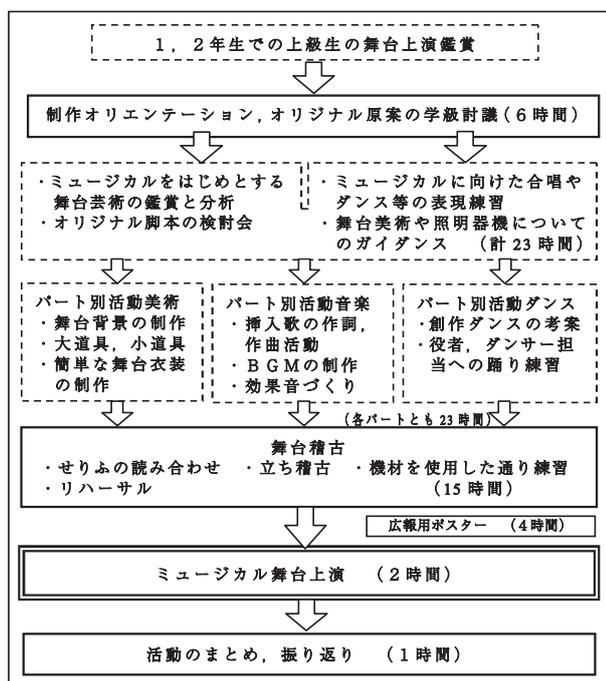


図2 ミュージカル制作の主な題材の流れ

これらの①～④の学習の全ての過程において、子どもたちには自分や他者の長所を認識したり、自尊感情・自己肯定感を育むといった学習経験を紡ぐことが期待される。

とりわけ、①においては、「自己アピールの力」「他者と協調し合いものを創り出す力」を培うことを目指し、②～④においては、音楽、美術、ダンスという、それぞれの得意分野に分かれ、「イメージを明確に伝えあいな

から表現を試行錯誤する力」、その過程における「問題を解決する力」「自分や友達の演技について、評価し合い、改善案を出す力」などが求められる。

さらに①～④までの全ての過程において、「イメージを言葉に置き換える力」、仲間と意思の疎通を図る手段として、言語活動が豊かに育まれることも期待されている。

#### 3) 実践の成果と課題

2004年度から3年間続いた文部科学省研究開発指定校の期間終了に伴い、2007年度以降はこうした大胆な教科再編の形態は解除されたが、現在も音楽科、美術科などほぼすべての教科・領域が総合的な学習の時間とかわり、集大成の上演までの3年間に、基盤となる様々な力を段階的に育んでいる。

そして何より同中学校恒例の春および秋のクラス対抗合唱祭における歌唱力の向上はもちろんのこと、楽曲に応じた曲想を深く解釈し表現力表現する力の向上を始め、音楽科そのものの充実にも総合表現活動での学びが活かされている。

この「表現創造科」の舞台上演の実践において、最も有効な手立てとなったもののひとつに、「受け手を意識した表現の改善を工夫したこと」が挙げられよう。常に、生徒たちが互いの舞台を鑑賞し合う、リアル・オーディエンス(本物の聴衆)を意識したフィードバックにより、自らの取り組みを客観的に見つめ直し、表現力、さらには表現意欲の向上に活かしたことが大きな成果をもたらしたのである。同時に、制作の過程で作品の課題が多く仲間と共有され、社会的に意義あるメッセージとして聴衆の心に届けようという視点からも、リアル・オーディエンスを意識した、舞台表現の練り上げが繰り返された。これらのことは、生徒各々によるリーダーチャートを通じた自己評価および教員によるパフォーマンス評価によって読み取ることができる。

一方、今次改訂の新学習指導要領におけるキーワードである「体験と言葉」についてもその成果は顕著であった。生徒による作詞の他、チームワークが要求される探求活動のプロセスでも、常時言葉のやり取りがベースとなっていた。このように実際の体験に基づく言葉の表現活動を組み込んでこそ、言葉で伝えたいという強い意欲が生じ、コミュニケーション力の向上が見られたり、他者とのかわり方を学んでいく、いわば生きる力、人間力に活かすことを体得していく様が、生徒たちの表現活動のプロセスにおける、パフォーマンス評価からも明らかとなった。また、国語科における朗読、群読の成果に舞台での演技を加えることで、さらに深い解釈や表現の探究につながったこともその成果の一例であろう。

総合表現活動を通して、既存の音楽科での学びにはどのような効果をもたらすかについてさらに言及したい。

生徒への意識調査については詳細を後述するが、次のような回答が多数得られたことは興味深い。

「表現創造科」の授業を通して、「歌うこと」に喜びが得られた。「この科目を学ぶことで自分は『鑑賞する力』を身に付けたと思うので、もっと学んでいきたいと思った。」これらの声からも、音楽科の教科学習に還元できる成果も得られたものとする。また、毎回の学習後、生徒たちがその日の活動を振り返るための「リーダーチャート」に記述された同様の文章からも、子どもたちに音楽そのものもつ意味や、音楽の果たす役割、あまたの芸術ジャンルの中で音楽のみがもたらす表現の特徴などを客観的に把握する機会にもつながったと捉えている。

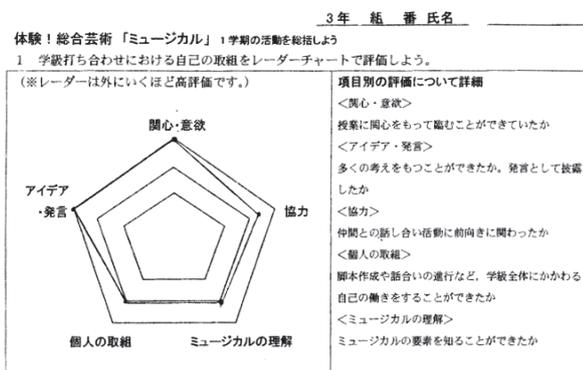


図3 レーダーチャート

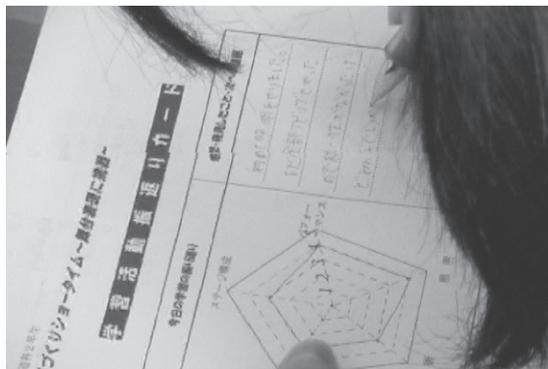


図4 レーダーチャートを書き込む生徒

このような成果と共に次のような課題も見出された。2006年12月8日、その年のミュージカル発表会の終了後、附属中学校が全校生徒を対象に行ったアンケート調査の結果、ミュージカル活動は「充実していた」と回答した生徒が、全体の約86パーセント、「少し充実した」と回答した生徒が、約14%であった。また、3年生への「ミュージカルを続けて欲しいか」という問いについては、88%の生徒が、「続けて欲しい」10%の生徒が「どちらかといえば続けてほしい」と回答した。これらの積極的でなかった回答者の理由として、2、3月の高校受

験を直前に控えた12月の上演を負担に感じている生徒の実態も明らかになった。

その他の検証すべき課題として、パフォーマンス評価に見られた、性差による表現活動の特徴を踏まえた支援策を今後は工夫していく必要性が挙げられよう。

例えば、男女混合グループにおける創作過程ではあまり浮き彫りにされなかったものの、男女別の創作活動になると、女子は大胆に表現活動をするのを躊躇する傾向が見られたのである。また、創作過程においても、女子は一つの活動への完成度にこだわるあまり、活動進度が停滞する場面がままた見られた。一方、男子は躊躇せず、さまざまな身体表現に大胆に挑戦するとともに、一つの活動への完成度にとらわれずに、次の活動に取り組む傾向が強いため、男女の活動進度に差異が見られた。

さらに、ミュージカルのシナリオ制作やキャスティングの段階においては、意見の食い違った女子のグループごとの対立がしばらく続き、教員も双方の意見を調整すべく想定外に多くの時間を費やすなど、支援に苦慮した経緯があった。こうした差異や混乱は、男女の性差による発達段階に起因するものと推測され、この思春期の子どもたちに特有な学習活動の特徴と受け止められる。

一方では、総合表現活動に携わる教員の専門性についての課題も浮き彫りとなった。美術科と音楽科の教員は配置されているものの、演劇および舞踊の指導者の育成は、現在の教員養成における盲点となっており、そのため、演劇・舞踊面のさらなる支援が望まれる場面がしばしば見られた。筆者が参観訪問の機会を得てきた米国のコネチカット州など、総合表現活動の先進的な地域の事例を鑑みるに、我が国においても、今後は演劇や舞踊の表現を十分に支援できる教員の資質向上が急務となろう。

また、長年に渡ってこの附属中学校で指導に携わった音楽科および美術科の教員によれば、ミュージカルづくりの実践上の課題も次のように指摘された。

担当する教職員の持ち時間、実際の授業時間とその運用、活動場所の確保など、さまざまな条件をクリアするためには、学校全体からのバックアップが不可欠であり、常にその問題と向かい合わせる。このように指導者としての条件の厳しい中、なおも毎年、活動内容を進歩させながら取り組みを続けていくためには、第一に考えるべき‘生徒の学び’の素晴らしさが他教科の教員にも認められていることが不可欠である<sup>(33)</sup>と強調している。

こうした事例に見る、総合表現活動を位置付けたカリキュラムにかかわるマネジメントの在り方について、天笠も、「組織をあげて取り組むことを通してこそ、質の高い豊かな総合表現活動を生み出す<sup>(34)</sup>」と述べている。

さらには、校内組織を整えること、すなわち教職員が協力して取り組む体制を整備する、教職員相互の連携・協力を促し協働を生み出す、そして総合表現活動の掲げ

るねらいや目標の達成をめざすための委員会の設置や指導体制の整備をはかるなどの必要性を掲げている<sup>(35)</sup>。

このたびの附属中学校の実践においては、学内の整備条件はある程度備わっていたものの、外部から支援を得るなど連携をはかることが今後検討されていくべき課題ではないかと考える。表現活動においては、生徒の選ぶテーマによっては、地域を舞台にしてその特色を取り入れ進められることも少なくない。さまざまな地域の人々から支援を得ること、それらの人々の力を活用することも充実した表現活動の実施には大切になってくるであろう。また、これらの営みを実現させていくためには、総合表現活動を含む諸々の教育内容を組織したカリキュラムを核にして、校長や研究主任のリーダーシップのもとで、教職員が互いに協働し目標の達成をはかることが重要となるであろう。

#### 4) 生徒への意識調査結果から

「表現創造科」に3年間取り組んできた、附属中の生徒を対象として、2006年12月12日にその成果を問う、3年生への独時の意識調査を実施した<sup>(36)</sup>。

本論では全8項目の調査結果のうち、紙幅の都合上、3項目の結果のみを次に掲げる。

問い1については、あらかじめ質問項目の選択肢を9つ設け、複数回答を可とした。また、「その他」という項目も設け、自由記述とした。それぞれに回答した生徒の人数を括弧内に示した。

問い1：ミュージカルの活動で、あなたが特に価値を感じたことは何ですか？

1. 舞台練習で仲間と協力しながら進めていくことができた。(112名中86人)
2. 「パート別活動」で自分の発想を生かしたり、仲間と協力しながら創作することができた。(80)
3. 配役以外のスポットライトや音響、大道具などの役割を果たすことができた。(68)
4. 役者として舞台に立ち、大勢の前で演技や歌、ダンスをすることができた。(68)
5. ミュージカルの制作と上演全体の中で、仲間の良さを感じ取ることができた。(67)
6. 舞台における演技・音楽・美術・ダンス等の専門性を伸ばすことができた。(52)
7. 「シナリオ検討会」の話し合いで「伝えたいテーマ」を考えてシナリオを創作することができた。(36)
8. ミュージカルの制作と上演全体の中で、自分の意見を仲間に伝えながら活動できた。(33)
9. ミュージカルを通して、自分の違う面を発見したり、自分を見つめたりすることができた。(32)
10. その他(2)

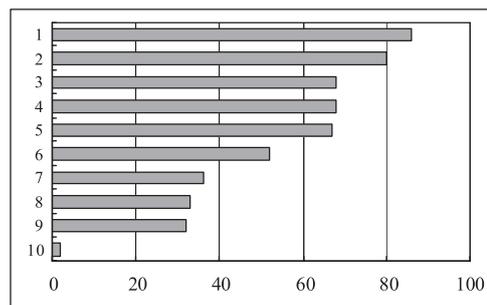


図5 問い1の結果

問い2では、あらかじめ質問項目の選択肢を7つ設け、複数回答を可とした。また、「その他」という項目は設けなかった。この問い2では、「体験！総合芸術－ミュージカルづくり－」の学習において、「舞台表現 Performance School」「手作りショータイム－舞台表現に挑戦－」「からだで表現してみよう－からだか作品、からだで演奏」「ビデオづくり」という4つの異なる活動のカテゴリーから、「からだで表現してみよう」および「手作りショータイム」を挙げた人に対してさらにその理由を問うた。

問い2：「からだで表現してみよう」「手作りショータイム」を挙げた人はその理由を教えてください。

1. ミュージカル等の総合芸術の楽しさを学んだ。(112名中84人)
2. 一つの作品をつくっていく中で、仲間の大切さ、協力することの素晴らしさを学んだ。(80)
3. 舞台上で表現する経験を持つことができた。(67)
4. 音楽・美術・ダンス等の芸術のつながりや効果的な表現方法を学んだ。(66)
5. 自分の表現力を高めることができた(54)
6. 新しい芸術の表現方法、オリジナルな表現方法を学んだ。(34)
7. 芸術的な活動や表現活動を通して、自分の違う一面を発見したり、自分を見つめたりすることができた。(26)

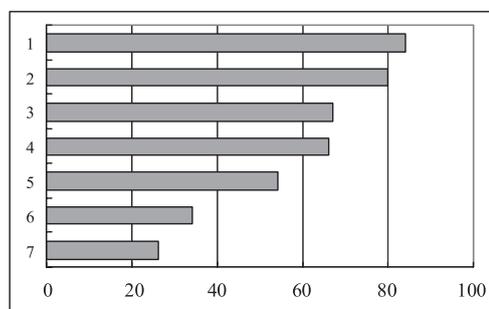


図6 問い2の結果

問い3では、「日本の教育に、表現創造科のようにミュージカルや劇をつくって発表する教科ができたとするれば、日本の小学生や中学生のためになると思うか」とい

う質問項目に対して、「ためになると思う」「どちらともいえない」「ためになるとはいえない」の3つの選択肢を設け、さらに各々がそれを選んだ理由を自由記述によって解答させた。

「ためになると思う」という記述に関しては、「音楽と美術の教科を融合させた新しい表現を学んだ。」「新しいものをつくる教科だった。」「仲間のよさを感じた、協力することの素晴らしさを感じた。」「ミュージカルという表現の集大成の活動ができた。」などの意見が見られた。

さらには、生徒たちが表現力の向上のみならず、演劇やミュージカルによって付けられる、これからの社会を生きていく上で大切な力についてのレベルにまで学習の意義への気付きが及んでいることが、次の感想の数々から読み取ることができる。「いつか社会の中で自分に生かせることが多くあり、それらはとても大切なものだと思う。」「自分を表現することについて、深く考えることをこの学習を通してできた。」「仲間の大切さ、協調性なども生活の部分でも大切なことがわかった。」「社会生活をしていく中で表現創造科の学びはかなり重要。これからも続けて欲しい。」「表現は人が生きていく上で必須。それを細かく学んでいくことは自分を育むよい機会だと思う。」こうした生徒の学びからは、生涯学習、キャリア教育の視点にも広げられた気付きを読み取ることができる。

「どちらともいえない」「ためにならない」の記述では、ミュージカルや演劇は有効だが、3年生として高校受験を間近に控えた時期であったことから、実施時期を早めることや、希望者だけがミュージカル制作に参加する、「選択制度にするべき」という提案などが見られた。

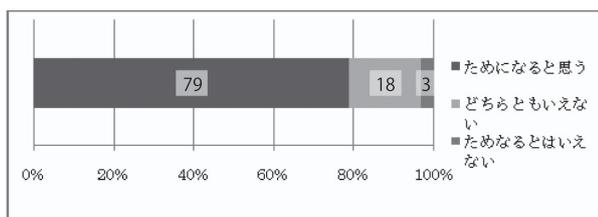


図7 問い3の結果

### 5) 教科再編の試みへの評価<sup>(37)</sup>

2006年度、すなわち研究開発に取り組んだ最終年度に同中学校が実施した、保護者に研究開発の評価を問うた調査の結果、「表現創造科」等の新教科の学習活動は「これからの時代に必要とされる創造的なコミュニケーション能力を伸ばすことができる。」などとして、90%以上の保護者が肯定的に受け止めていることが明らかになった。

また、毎年秋の大規模な公開授業研究会においても、附属中学校の教科再編に挑んだ3年間の研究開発への評

価は高いものであった。2006年10月13日に行なわれた教育研究協議会における参会者へのアンケート調査からは、「何のために役に立つのか、世の中の役に立つのか、と生徒たちの学習意欲が低下している中で、さらに学びたい、おもしろい、日常生活で使えそうだと、有用感を持たせている。」「小学校で始まった総合を中学校に当てはめるのは難しく、その点、枠組みを再編する試みは意義あるもの。」等、賛同する教育現場からの多くの声が多く寄せられた。

そして附属中学校が実施した総合表現活動に3年間継続して取り組んだ、3年生112名への意識調査結果から、「表現創造科」の学びの意義等についての8項目の質問に対して、肯定的な回答を示した生徒は全項目で85%以上に達しており、自由記述文からは、「コミュニケーション力の向上、仲間との信頼や団結を深めた、自己表現する楽しさを学んだ」などの回答が多くを占めた。

### 6) その後の附属中学校の取組

本論ではこれまで、附属中学校における、2004年度から3年間の新教科設置のもとで試みられた事例に焦点をあてた。2007年度以降はこうした教科再編の形態を解除したが、現在も音楽、美術などほぼすべての教科が総合学習とかかわり、集大成の上演までの3年間に、基盤となる様々な力を段階的に育てている<sup>(38)</sup>。

時を隔てて、2009年5月には全校生徒による、恒例の春の合唱コンクールが開催され、極めて高いレベルでの各学年、学級対抗での熱唱が繰り広げられた。12月のミュージカル上演の前にはさらに秋の合唱コンクールも開催されるため、年間に2回もの全校合唱行事の実施という、全校的に見ても合唱が盛んな伝統も併せ持つ。こうした音楽科本来の基礎的な活動の充実した素地もまた、同中学校のミュージカル伝統に結びついたものと分析する。今年で13年目を迎える舞台発表であるが、12年目の昨年度、平成20年12月にも、3年生の自主制作による3クラスの3作品の上演がされた。

総合表現活動をより充実させるためにも、まずよい作品や上演活動に触れることが大切であり、芸術表現のすばらしさに実際に触れることから生じる感動体験は、子どもたちの創作活動にさまざまな示唆を与えてくれるものであると捉える<sup>(39)</sup>。筆者は同中学校のミュージカル製作に長年携わりながら、地方という地理的環境から子どもたちが生のミュージカル演奏を鑑賞する機会に恵まれないという課題を抱えてきた。

しかし、2009年の5月には上越教育大学音楽コースの大学院生の有志によって、『オペラ座の怪人』の生演奏が披露されたことについて実現に至ったのである。同中学校体育館のステージを舞台として、附属中学校の3年生約120人全員が鑑賞した。大学院生によるキャストは

歌手が7名、ピアノ、ダブルベース、チェロ、フルートなど、僅か5名による楽器編成で行い、ストーリー展開も本来の半分以下の時間である約40分に短縮した。舞台道具の設置はないものの、衣装や小道具を整えることで雰囲気盛り上げた。生の演奏を鑑賞したその日に実施した生徒たちの感想文からは、訓練された素晴らしい歌声、マイクなしでありながらの大きな声量、演じている際の演技力などにさまざまな感動を得たことが記述されていた。今後もできる限り、大学や地域の演奏団体などとコラボレーションして、このような生の上演を鑑賞させることに努めたい。

#### 4. 学習モチベーションを高め評価観点を広げる多元的知性

本論の冒頭でも述べた、PISAの世界標準学力テストの結果を受け、我が国の子どもたちが学びのモチベーションを失っている現状が厳しく指摘されている。自分なりの考えを持ちそれを表現する力に欠けていたり、ひとつの正答は求めることができても多角的なものを見方ができないといった結果も公表された<sup>(40)</sup>。こうした今日的課題を解決していくためにも、総合表現活動が大きく貢献できるものとする。この活動が本来備えている、協同的かつ探究活動を十分に展開できるならば、他者とのかかわりの中で子どもたちは自尊感情を自ずと高めていくことが可能になるであろう。また、子ども自身が必要とされている仲間との共同創作に自らの役割を意識し、表現活動に主体的にかかわりたいという思いがはぐくまれることで、学習へのモチベーションは確実に変わってくるのではなかろうか<sup>(41)</sup>。こうした多面的な総合表現活動を評価する際に、現行の学校教育の評価の観点そのものを変えていくことも極めて重要ではないかと考えた。

そこで着目したのが、ハワード・ガードナーによる、知性にはいくつもの類型があるとする多元的知性の理論である<sup>(42)</sup>。ガードナーによれば、知性には言語的知性、論理数学的知性、空間的知性、身体運動的知性、音楽的知性、対人関係的知性、内面的知性、博物学的知性の8つが存在するとしている。この多元的な知性には、いわゆる頭だけではなく、身体や感情の面もふくまれている<sup>(43)</sup>。このように、知性を多元的に捉えることで、学習活動そのものの切り口や、多彩な角度から評価を改善する発想も生まれ、子どもたちが各々得意とする分野からのアプローチを促進する工夫もなされよう。

今日の我が国の学校教育では、言語的知性や論理数学的知性だけが重視され、その他のものは従的な位置しか与えられていない現状にあり、これは米国など多くの先進諸国の共通の課題であろう<sup>(44)</sup>。我が国の今後の学習指導要領の改訂を鑑みても<sup>(45)</sup>、言語的な知性や論理数学的な知性が重視されており、トータルに多元的な視点

からのカリキュラム編成がなされていない現状である。



図8 ガードナーの掲げる8つの知性

先の附属中学校の活動のみならず、総合表現型カリキュラムを実践する多くの学校の活動が示唆するように、総合表現活動の中で、「他者に必要とされている」「仲間に貢献している」とした思いから、他者とのかかわりの中で子どもが自尊感情を高めていくことが可能になるものと捉えている<sup>(46)</sup>。このことは総合表現活動が、ガードナーの多元的知能に示される、「対人関係的知性」や「内面的知性」を培うことに適したカリキュラムであるとも言え換えられよう。今後は我が国においても、得意分野の異なる子どもたちへの公平な評価を組み入れるカリキュラムへの改善が、PISA型の学力向上に向けても重要になってくるであろう。そのためにも、総合表現活動において、多元的知能に基づいた具体的な評価観点を作成することは極めて大きな意義がある<sup>(47)</sup>。そしてこの観点を取り入れるならば、子どもたちが制作過程の各役割分担において互いの得意を生かし認め合う機会をもたらずばかりでなく、教師にとっても個々の子どもたちが発揮する多彩な力を見取ることを可能にするものとする。

## 5. 総括

### 1) 新しい教科・領域の内容とかがわる表現活動

本論の第2項では、総合的な学習の実施に向けた総合表現活動のカリキュラム開発の模索が始動した1990年代半ば以降、その萌芽期の実践を振り返ってその変遷をたどった。そして、その後急速に全国で試みが展開された、教科再編に挑んださまざまな学際型カリキュラムの実践の中から、特に大規模な改編に取り組んだ上越教育大学附属中学校の「表現創造科」の実践に焦点を絞り、その学びの展開や成果と課題等を第4項において考察した。

第3項で1997年当時に試みた、全国の小・中学校の研究先進校の表現活動のカリキュラムのタイプ別分類図を提示したが、この図の中に、現在の多種多彩な実践を当てはめ、分類することは到底不可能になってきている。そこで、2009年現在の特徴的な実践の一部を主と

して4つの芸術領域やさまざまな教科とのかかわりを捉えて分類を試みたものを次ページの図9に掲げるものである。

およそ20年以上の醸成期間を経た現在、総合表現活動は、音楽科と総合的な学習の時間やその他の教科・領域の学習がかかわることで、あるいは音楽科とは独立した、新教科として試みられているカリキュラム<sup>(48)</sup>も含んで、その実践は実に多岐に及んでいる。図9に示した、最新の多彩な実践事例のそれぞれの成果と課題を検証することは紙幅の都合上、今後の機会に譲るものとする。

今日では、表現活動と横断的にかかわる各教科・領域の学習の内容が現代の課題を盛り込む方向に転じていることを受けて、表現活動そのもののかかわり方も大きく拡がりと変化を見せてきているといえよう。例えば、技術・家庭科は従前ならば、衣装や舞台製作という定まった役割が固定観念として存在したことは否定できない。

しかし昨今では、技術・家庭科においても科学的なアプローチを取り入れたり、いのち教育を扱うなど、時代の要請と共に変化してきている。こうした中で、表現活動がかかわることで、科学の学習を感性で学ぶ学習にまで高められた感動的な実践事例を最後に取り上げ、ここに総合表現型カリキュラムの意義と可能性を改めて示すものである。

## 2) 表現活動で深める科学的感性と情意面からの学び

新潟大学教育学部附属中学校の公開研究会における、技術・家庭科「生命科学と人間～DNAとヒトゲノム～」(2年生)、「ゲノムからみたヒトとしての人間を表現しよう」<sup>(49)</sup>では、学習課題である、「DNAのしくみと働きからヒトが生きていることを表現しよう」を探究した。

生徒は言語、絵画などさまざまな表現方法をイメージし、比較する中で「ヒトゲノムにあるDNAの配列は音符に似ていて音で表現できそう。」と考えた。そこで、リコーダー、ハンドベル、シンセサイザーなどさまざまな楽器を駆使して、自分たちのイメージに合う音を探し、各グループ毎に作曲し、演奏を発表し合った。

自分の身体の中で常に動きのある“ふるまい”をもったヒトゲノムからみる視点を大切に、DNAの塩基配列情報を音の情報に変え、そのしくみの美しさや生命を育む働きを曲として表現していく、という音楽的表現活動に挑んだのである。これらの作曲は、ヒトが生きていることをモチーフにした芸術的作品として、聴く者に伝わってきた。音を自ら奏でる表現を経て、科学の神秘的な美しさに改めて気付いた者、人為的に遺伝子を操ることの倫理観に改めて目覚め、生命への畏敬を感じたという者など、知識だけでなく、心と感性で自然科学の学びを深めていた。この成果は生徒たちの次のような、授業後

の作文にも読み取ることができ、「人類の長い営みから築き上げられた遺伝子の配列にいたずらに手を加え、遺伝子を操作してはならない。」といった、倫理観への気付きにまで学びを深めていた。

この日、発表された「科学的な感性」を芸術的な作品にまで高めた作品の数々は、深い感銘をもって筆者を含めた公開授業の参会者の大人たちに訴えかけ、感動を共有し合った。このような子どもたちの豊かな感性を育むために、今後も教科・領域の枠にとらわれない融合や越境に挑むことの重要性、意義を学んだ。そして、子どもたちの豊かな表現活動を読み取っていくためにも、何より大人の感性の扉そのものも、絶えず開いていかなければならないという気付きに至った。

## 3) さまざまな教科・領域とかがわる多彩な実践

冒頭にも述べたように、今日では子どもたちの幅広いコミュニケーション力を学校においても育成していく必要性に迫られているという緊急課題に直面している。

本論を通じてその成果を展望してきたように、総合表現型カリキュラムはその課題解決に向けてのさまざまな力を子どもたちにもたらす大きな可能性を含んでいることが明らかになった。さらに今後は、本論で触れた総合表現型カリキュラムの課題を解決していくことで、総合表現型カリキュラムそのものが多様に進化していく可能性も示唆される。すなわち、子どもたちの発達段階、性差に応じた表現活動の支援や、時代とともに変遷するであろう、その時々教育課題の探究を促すなど、それぞれの状況に応じた課題解決に貢献していくことも望まれよう。

現に今日では、小・中学校の技術・家庭科の「食の大切さ」、「いのち教育」の学びや、国際理解教育、情報教育、環境教育における諸課題の探究において調べ学習を発表する際のプレゼンテーションなど、全ての教科・領域において表現活動を活用する実践が見てとれる。すなわち、表現というアウトプットを通じて、子どもたちの思いや気付きをさらに深めるべく、知識面と情意面の双方からの学びを目指す活動が、さまざまな教科・領域において格段に増えてきている現状にあるといえよう<sup>(50)</sup>。

折しも小学校高学年における外国語活動の本格的導入を目前に控え、身体表現活動、チャンツや歌などを取り入れることで、異文化の習慣などを主体的に楽しみながら学ぶことを促す手立てとしても、総合表現活動に寄せられる期待は非常に大きなものとなっている<sup>(51)</sup>。

このように子どもたちの主体的・探究的な活動をより活発化させていくことを求めて、多彩な表現活動がさまざまな教科・領域の学びにおいて現実に一層活かされてきている。こうした現状を鑑みても、総合表現活動は既にその発展期を経て、今まさに実り多い充実期を迎えて

いるといっても過言ではないだろう。

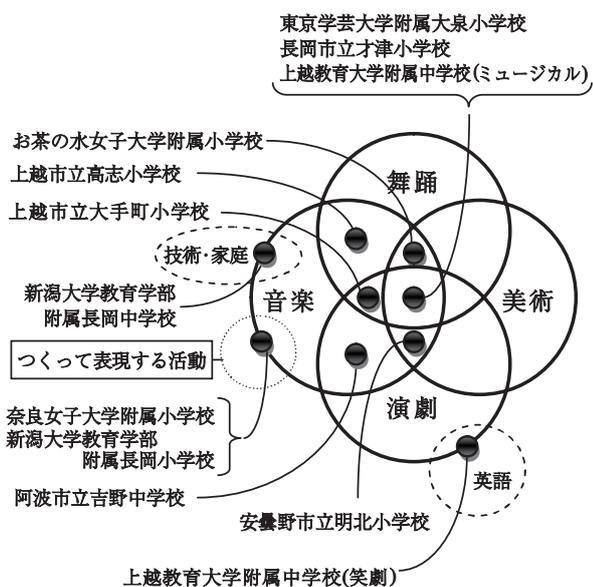


図9 4つの領域と教科・領域へのおよその位置付け  
(時得 2009)

— 引用・参考文献 —

(1) 国立教育政策研究所『PISA2003年調査 評価の枠組み』ぎょうせい, 2004

(2) 時得紀子「総合表現活動を総括する」時得紀子編著『総合表現活動の理論と実践』教育芸術社, pp.79-102, 2009

(3) 文部科学省「教育方法の改善に関する調査研究」委託研究 調査研究課題「総合的な学習に関する研究開発学校等の研究成果と実践的課題」(委託研究報告書) 時得紀子「総合的な学習と表現教育」1996

(4) 文部科学省「教育方法の改善に関する調査研究」委託研究 調査研究課題「総合的な学習に関する研究開発学校等の研究成果と実践的課題」(委託研究報告書) 時得紀子「小千谷市立小千谷小学校 親と教師で創る授業」「上越教育大学附属中学校総合的な学習の時間 グローバルセミナー」1998

(5) 時得紀子「総合的な学習と表現教育」pp.131-148, 村川雅弘編著『総合的な学習のすすめ』日本文教出版, 1997

(6) 時得紀子『総合的な学習と表現教育—小学校における研究開発学校の実践を中心に—』上越教育大学研究紀要, 第17巻, 1997

(7) 時得紀子「子どもを表現者にする総合的な学習」田中博之編著『総合表現型カリキュラムを創る』明治図書, pp.43-52, 2001

(8) 時得紀子「音楽の授業をこう変える」水越敏之編『学校づくり・授業づくり』ぎょうせい, pp.171-192, 1999

(9) 前掲書(5), p.132, 1997

(10) 東京都千代田区立錦華小学校研究紀要『国際社会を豊かに生きる児童の育成』p.6, pp.38-45, 106-115, 1993

(11) 田中耕治『新しい時代の教育課程』有斐閣, p.99-122, 2005

(12) 神戸大学発達科学部附属幼稚園・明石小・中学校研究会『総合・探究学習と新カリキュラム構想～幼稚園・小学校・中学校の連携研究から～』pp.14-15, 40-41, 1996

(13) 長野県伊那市立伊那小学校 公開指導研究会研究紀要『内から育つ』pp.108-113, p.117, 1996

(14) 田中博之「総合表現型カリキュラムのデザイン」田中博之編著『総合表現型カリキュラムを創る』明治図書, p.30, 2001

(15) 田中博之『総合的な学習で育てる実践スキル30』明治図書, p.101, 2000

(16) 前掲書(15), p.101, 2000

(17) 前掲書(5), p.132, 1997

(18) 新潟県上越市立大手町小学校 研究紀要『子どもの明日を見つめて』pp.14-15, pp.75-78, 1997

(19) 新潟県上越市立大手町小学校『大手町小学校教育課程開発研究これからの教育を語る会』pp.20-21, 1997

(20) 新井郁男, 上越教育大学学校教育学部附属中学校『中学校こうしてつくった総合学習』教材研究開発所, 1998

(21) 上越教育大学附属中学校『年間指導計画 さくら PLAN 2004～2006』上越教育大学附属中学校「表現創造科」pp.1-31, 2006

(22) 上越教育大学附属中学校『平成16年度 研究開発実施報告書』上越教育大学附属中学校2005

(23) 上越教育大学附属中学校「文部科学省研究開発学校総合的な学習の時間と教科の枠組を再編した新たな教育課程の研究開発(三年次)教育研究協議会の報告」上越教育大学附属小学校, 高田教育研究会『教育創造』vol.154(通巻279号) pp.56-57, 1996

(24) 上越教育大学附属中学校『総合的な学習の時間と教科の枠組みを再編した教育課程の研究開発—切実感を高めながら学び続ける生徒の育成—研究紀要Vol.2』上越教育大学附属中学校, pp.2-149, 2005

(25) 上越教育大学附属中学校『総合的な学習の時間と教科の枠組みを再編した教育課程の研究開発—切実感を高めながら学び続ける生徒の育成—研究紀要Vol.3』上越教育大学附属中学校, pp.86-99, 2006

(26) 前掲書(25), pp.2-22, 2006

(27) 前掲書(21), pp.1-31, 2006

(28) 前掲書(21), p.1, 2006

(29) 前掲書(25), p.86, 2006

- (30) 前掲書(25), p.87-88, 2006
- (31) 前掲書(21), pp.1-31, 2006
- (32) 上雅次・遠藤好子「再編教科表現創造科における取組」時得紀子編著『総合表現活動の理論と実践』教育芸術社, pp.63-66, 2009
- (33) 前掲書(32), p.66, 2009
- (34) 天笠茂「総合表現活動を生かすスクールマネージメント」時得紀子編著『総合表現活動の理論と実践』教育芸術社, p.29, 2009
- (35) 前掲書(28), p.30, 2009
- (36) 時得紀子・小町谷聖『総合表現活動のもたらすもの—上越教育大学附属中学校「表現創造科」の取組から—』上越教育大学研究紀要第28巻, pp.243-256, 2009
- (37) 前掲書(36), p.244, pp.248-252, 2009
- (38) 上越教育大学附属中学校「人とのコミュニケーションを生かした実践「表現創造科」『新たな単元開発への挑戦—総合と教科が一体化した単元の魅力—』東洋館出版社, pp.104-123, 2006
- (39) 前掲書(2), p.91, 2009
- (40) 国立教育政策研究所『生きるための知識と技能2』ぎょうせい, 2004
- (41) Bennett Reimer, National Association for Music Education Menc Bennett Reimer (Editor):Performing With Understanding: The Challenge of the National Standards for Music Education, 2000
- (42) Gardner, H. Multiple Intelligences: The theory in practice. New York: Basic Books, 1993.
- (43) ハワード・ガードナー著 黒上晴夫監訳『多元的知能の世界—MI理論の活用と可能性—』日本文教出版, pp.138-154, 2003
- (44) New York City Department of Education. Blueprint for teaching and learning in the arts: Grades K-12. New York: New York City Department of Education, 2004
- (45) 文部科学省『中学校学習指導要領』MEXT 1-0804, 東山書房, 2008
- (46) Tokie, N., Endo, Y., Kami, M., & Muto, T. Effectiveness of integrated arts curriculum for Japanese students and plans for the future model in Japanese schools: To cultivate communication skills. ISME 2008 World Conference publish, 2008
- (47) Gipps, C.V. Beyond Testing : Towards a theory of educational assessment, The Falmer Press, 1994
- (48) 田中龍三「大阪教育大学附属池田中学校のドラマ科」時得紀子編著『総合表現活動の理論と実践』教育芸術社, pp.23-25, 2009
- (49) 小畑活「新潟大学教育学部附属長岡中学校 技術・家庭科—生命科学と人間～DNAとヒトゲノム～」時得紀子編著『総合表現活動の理論と実践』教育芸術社, pp.67-70, 2009
- (50) 上越市立大手町小学校『人間力』「食料その日にみられる子どもの姿から」大手町小学校出版, 2007
- (51) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 外国語編』MEXT 1-0815, 東山書房, 2008

本論は、平成19年度から21年度の日本学術振興会科学研究費補助金 研究代表者:時得紀子, 基盤研究(C)「小・中学校の総合表現型カリキュラムの開発と評価—日米の研究先進校をモデルとして—」, 課題番号:19530794における, 調査研究の一環をなすものである。